

青年期の向社会的な道徳的推論と自己・対人観

若山由子

(お茶の水女子大学大学院人間文化研究科 研究生)

【目的】 向社会的な道徳的推論の研究は、向社会的行動の背後にある動機づけの理解を目的とする。動機が質的に高まれば、自ずとその行動量も増大し安定性を示すと期待される。また、動機には個人の価値観が基盤となっていることから、本研究では5つの推論カテゴリー比率及び自己・対人観を調べ、更にその関連を検討する。

【方法】 被験者：東京都内及び近郊の8大学に通う計422名(男子189, 女子233)。分析対象は回答に不備のない381名(男子170, 女子211)。調査時期と手続き：1998年12月。全配布数は750部、回収率は56%であった。

向社会的な道徳的推論の質問紙：Carloら(1992)のPROM(the prosocial reasoning objective measure)を翻訳し一部修正し用いた。この尺度は道徳・向社会的なジレンマ場面を想定した7つの例話で構成されており、各被験者がどの推論カテゴリーの概念を用いて判断する傾向があるかが示される。

自己・対人観の質問紙：質問項目は22項目、7件法(1=全くあてはまらない~7=非常にあてはまる)で回答を求めた。若山(1998)の調査データを再度因子分析(主因子法, Varimax回転)して得た各因子(4因子解)に最も負荷量の高い項目の内容を検討した上で、各々の因子を命名し下位尺度とした。

【結果と考察】

●向社会的な道徳的推論

Cronbachの α 係数は、快楽主義的指向(Hedonistic)、要求に目を向けた指向(Needs oriented)、承認指向(Approval)、紋切り型の指向(Stereotyped)、内面化された段階(Internalized)、各々.77, .73, .88, .75, .85であった。

性および学年の2元配置の分散分析を行った結果、性の主効果($F(1, 373)=9.56, p<.01$)のみがあり、学年の主効果および交互作用は認められなかったため、この結果のみを取り上げ表1に示す。また、各下位尺度得点を総計得点で割った比率得点平均を表2に示す。

表1 向社会的な道徳的推論の平均値と標準偏差及び分散分析

	女子学生 (N=211)		男子学生 (N=170)		F値
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
快楽主義的指向	34.06	5.13	32.02	6.78	9.56**
要求に目を向けた指向	37.34	5.96	32.74	7.68	37.79**
承認指向	24.95	6.99	23.29	7.92	4.08*
紋切り型の指向	32.10	5.67	28.05	6.87	40.60**
内面化された段階	36.96	5.25	32.26	6.90	52.72**

得点可能範囲：7.00~49.00 ** $p<.01$ * $p<.05$

表2 比率得点に変換した平均値と標準偏差

	女子学生 (N=211)		男子学生 (N=170)		全体 (N=381)	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
快楽主義的指向	.21	.04	.22	.03	.21	.04
要求に目を向けた指向	.23	.05	.22	.03	.22	.03
承認指向	.15	.02	.16	.02	.15	.02
紋切り型の指向	.19	.03	.19	.03	.19	.03
内面化された段階	.22	.04	.22	.03	.22	.03

●自己・対人観

どの因子にも因子負荷量の絶対値が.35以下の低い項目や2つ以上の因子に同程度の値を示す項目が多く含まれていた6項目を除外し、最終的に選択された16項目の因子構造は、全22項目の因子構造と基本的に同じであった。男女別に因子分析を行ったが因子構造に大きなずれはみられなかった。寄与率は44.2%。Cronbachの α 係数は各々.82, .67, .63, .78であった。分析は性と学年の2元配置の分散分析で行った。結果は表3のとおりであった。

表3 向社会的な道徳的推論の平均値と標準偏差及び分散分析

	女子学生 (N=211)		男子学生 (N=170)		F値		
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	性	学年	交互作用
互助性	5.00	0.83	5.09	1.19	12.28**	n.s.	n.s.
自律・独立性	4.62	0.88	4.49	0.96	n.s.	n.s.	n.s.
他者評価への懸念	4.20	1.03	4.56	1.06	9.07*	3.95**	n.s.
閉鎖・内向性	4.38	1.31	4.59	1.47	n.s.	7.30**	n.s.

得点可能範囲：1.00~7.00 ** $p<.01$ * $p<.05$

2年生の「他者評価への懸念」の得点が1年生に比べて若干高くなっているものの、3・4年生ではいずれも1年生の得点よりも低くなっていた。

●PROM得点と自己・対人観項目得点の関係

表4-2 PROMと自己・対人観の相関(男子学生：N=170)

	互助性		他者評価への懸念	
	自律・独立性	閉鎖・内向性	自律・独立性	閉鎖・内向性
快楽主義的指向	-0.15**	0.07	0.19*	0.08
要求に目を向けた指向	0.34**	-0.16*	0.10	0.06
承認指向	0.21**	-0.12	0.28**	0.13
紋切り型の指向	0.40**	-0.11	0.11	0.10
内面化された段階	0.51**	-0.15	0.09	0.12

** $p<.01$ * $p<.05$

表4-1 PROMと自己・対人観の相関(女子学生：N=211)

	互助性		他者評価への懸念	
	自律・独立性	閉鎖・内向性	自律・独立性	閉鎖・内向性
快楽主義的指向	-0.06	-0.01	0.17**	0.09
要求に目を向けた指向	0.22**	-0.09	0.08	0.08
承認指向	-0.00	-0.21**	0.28**	0.08
紋切り型の指向	0.25**	-0.03	0.09	0.07
内面化された段階	0.40**	-0.00	0.02	0.00

** $p<.01$ * $p<.05$

表4-1, 4-2から分かるように、男女に共通して、高次の道徳的推論カテゴリーである内面化された段階の推論と「自律・独立性」の間には相関はなかった。これは、尺度作成の段階の項目を減らす過程で収斂したように見えていた本調査の自己・対人観の下位尺度である「自律・独立性」が、実は「自己信頼性」の項目を失ってしまったためだと推測する。「自律・独立性」が、「自己信頼性」を伴わない利己主義的な側面を測るような項目が多く含まれて構成されていたため、これらの項目に引っ張られるかたちで、内面化された段階の推論との相関がなかったのではなかろうか。自己・対人観の下位尺度間の相関でも、「自律・独立性」は「他者評価への懸念」と「閉鎖・内向性」とは低い相関がみられたが、「互助性」との間ではほとんど相関がみられなかった。このことも、上記のこの理解の手がかりになろう。一方、この推論は、男女に共通して「互助性」との有意な比較的高い正の相関があった。いわば「互助性」が発達するということが、他者との相互関係が健全に機能しているということをあらわしているのではなかろうか。もともと「互助性」は、若山(1998)での下位尺度であった「他者信頼性」と「互助性」が項目を減らす過程で収斂したものである。したがって、本調査での「互助性」には「他者信頼性」の側面が含まれている。すなわち、高次の道徳的推論とは、他者に対し基本的な信頼感が存在してこそ成り立つものであると言えよう。実際に若山(1998)では、内面化された段階の推論は、「互助性」および「他者信頼性」と中程度に正に相関していた($r_s(142)=.35, .30$)。

山岸(1998)は、より良い社会が形成される必要条件として、「信頼」をとりあげこの構造を検討している。彼は「信頼」が「閉ざされた関係からの解放」、あるいは「自発的な関係の形成者」となると主張する。さらに、「閉鎖的な集団主義社会からより開かれた社会への転換に際して、一般的信頼がきわめて重要な役割を果たす」と述べ、また信頼は、「関係強化」の側面だけではなく、「関係拡張」の側面があると論じる。「互助性」の概念は、この「閉ざされた関係からの解放」、あるいは「自発的な関係の形成者」概念と一致する。すなわち、他者への信頼を構造的に含んだ「互助性」が高次の推論の形成を促すものであると言えよう。いわゆる「普遍的な道徳性」には、他者一般に対する信頼が密接に関係している可能性があるのではなかろうか。

自己・対人観の「自己・独立性」項目を入念に再検討する必要がある。今後、この内容に検討を加えた上で、高次の向社会的な道徳的推論の発達には、どのような自己・対人観が深く関わり、また逆にそれを阻むものなのかを考察して行きたい。引用：山岸俊男 1998 信頼の構造 東京大学出版会